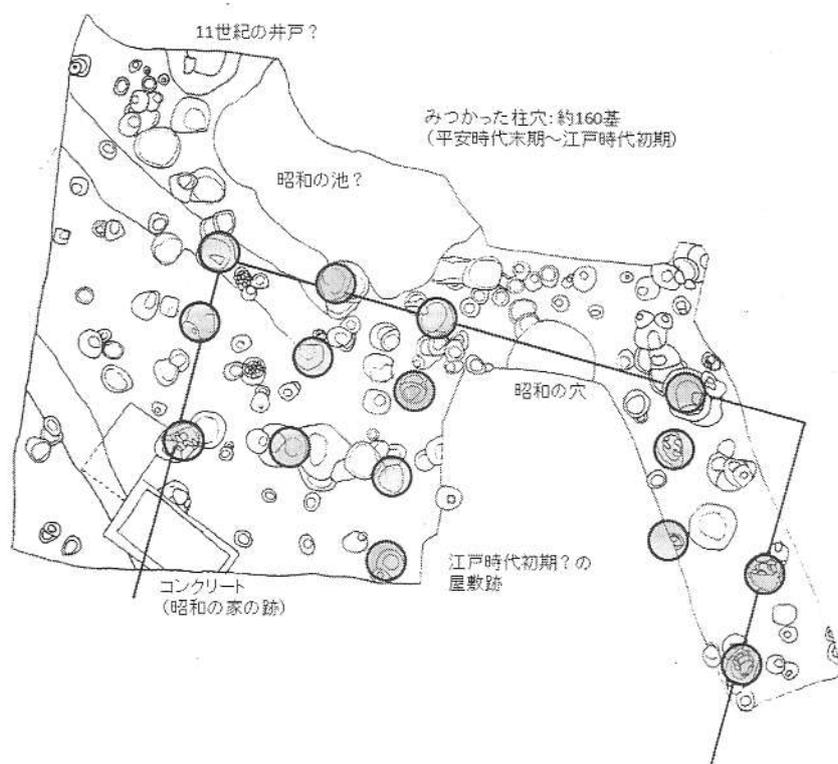


## 黒岩城跡発掘調査地元説明会資料

黒岩城跡は中世に北上地方を治めていた和賀氏に關係の深い城館跡で、おもに 950 年前から 400 年前の遺跡です。今回の調査地点は主郭（しゅかく）である千曳城（ちびきじょう）の区域内にあり、城跡の中でも重要な場所と考えられます。

調査の結果、柱穴が約 160 基みつけられました。これらは大小さまざまで、深いものもあれば浅いものもあります。また柱を乗せるための台石を置いたものや、礫を敷いたり組んだりしたものもあります。中には柱の材が残っているものもありました。これらの柱穴が組み合わさって建物跡となるわけですが、柱穴が多く重なりあっていることから、いろいろな時代の建物跡が複雑に絡み合っていることが予想されます。

このことは、出土した遺物からもうかがわれます。平安時代終わりころ（950 年前）のカワラケ、戦国時代（450 年前）の輸入陶磁器、江戸時代（350 年前）の銭貨や陶磁器などが見つかっており、この場所が継続して使われていたことを物語っています。特に注目されるのは 950 年前のカワラケ（お皿の形をした土器で、当時の有力者が使用したもの）です。今回見つかったのは小さな破片ばかりですが、これは市内のどこからでも見つかるものではありません。黒岩城跡や白山廃寺跡など、なぜか黒岩の遺跡から特徴的にみつける遺物です。このことは、和賀氏が黒岩城跡を拠点の一つとして利用し始める鎌倉時代以前に、この地に別の有力者がいたことを示しています。



このように黒岩城跡は黒岩のみならず、北上の歴史を知るうえで極めて重要な遺跡です。今回の調査でも、貴重な発見がありました。今後とも、この遺跡を守り後世に伝えていくとともに、継続して調査を行っていく必要があります。